

令和 3 年度  
第 2 回  
総合教育会議議事録

日時 令和 4 年 1 月 31 日 (月) 午前 9 時 30 分～  
場所 いわき市体験型経済教育施設 Elm (エリム)

## 第2回総合教育会議 議事録

1 日 時 令和4年1月31日（月）午前9時30分～午前11時45分

2 場 所 いわき市体験型経済教育施設Elem(エリム)

3 出席者  
いわき市長 内田 広之  
いわき市教育委員会 教育長 水野 達雄  
いわき市教育委員会 教育長職務代理者 馬目 順一  
いわき市教育委員会 委員 根本 紀太郎  
いわき市教育委員会 委員 宮澤 美智子  
いわき市教育委員会 委員 小峰 美保子

4 議 題 GIGAスクールとデジタルシティズンシップ

これからの時代に必要な規範とはなにか  
(ゲストスピーカー)

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 豊福 晋平氏

### 【会議内容】

1 開会

2 議事

会議設置要綱第4条の規定により、市長が議長となること、また、同要綱第7条第2項の規定による第2回会議の議事録への署名は、水野教育長及び小峰委員が行うことを確認した。

①会議概要の説明

【内田市長】

- ・第1回目の総合教育会議では、ICT利活用のモデル校として県から指定を受けている内郷第一中学校において、タブレット端末等の活用状況について視察した。
- ・今回第2回目となる総合教育会議においては「GIGAスクールとデジタルシティズンシップ これからの時代に必要な規範とはなにか」という議題で、ゲストスピーカーとして国際大学・グローバル・コミュニケーションセンターの豊福晋平先生をお呼びし、ICT教育に関する先端的な取組みについて講話を頂くこととした。
- ・講話を頂いた後は、フリーディスカッションの時間を1時間ほど設け、皆様からご意見を頂きたいと考えている。講話内容については、教育委員会から各学校の先生方にも後日配信するため、現場にも役立つ貴重な機会と思っている。

・豊福先生のご専門は教育心理学、教育工学、学校経営であり、教育の情報化や学習者を中心に据えた学習活動、社会的構成主義など、多岐に渡る分野を研究されている。ご略歴としては、1967年に北海道にお生まれになられ、1992年に横浜国立大学教育学研究科を修了、東京工業大学の博士課程に進学をされている。その後1995年には国際大学グローバル・コミュニケーションセンターに勤務され、主幹研究員・准教授として長年に渡り「教育と情報化」をテーマに研究を進められている。それでは豊福先生、宜しくお願ひします。

### 3 協議事項

#### ①講話

##### 【豊福講師】

※「GIGAスクールとデジタルシティズンシップ これからの時代に必要な規範とは何か」について資料を基に講話を頂く。

#### ②フリーディスカッション

##### 【内田市長】

- ・豊福先生、ご講話頂き誠にありがとうございました。「GIGAスクールとデジタルシティズンシップ」について、最先端の考え方と色々な事例を交えてお話し頂き、大変勉強になった。教育委員の方もいらっしゃるので、以降は質疑応答という形で進めさせていただきたい。
- ・先生からお話し頂いたことについて、今の福島県やいわき市の現状にどういう風に当てはめるべきかを考えながら聞いていた。11年前に東日本大震災があり、県全体、そして東北では復興に向けいろいろな取組みが行われてきた。私も県全体の教育計画の策定に関わったことがあったが、その中で話題になったのが、震災復興、目の前の対応に追われて中々ICTの本格的な使用にまで至らないというものだった。実際データを見ても、授業の中でICTを使いこなして授業を行っている割合が非常に低かった。これは本市だけでなく、県全体での話と受け止めている。
- ・その一方で、福島県の子どもたちは震災を経験して「知識」に飢えており、避難所の運営や演劇の体験等を通じて考えたりするような、いろいろな活動をしている。また新しい学習指導要領における「主体的で対話的な深い学び」に基づく活動を現場で行っている先生もかなり多く、そこは強みだと感じている。
- ・今のいわき市に照らし合わせれば、社会全体のいろいろな事象を一人ひとりが自分なりの体験や言葉に解釈して深化させていく部分にうまくICTを絡ませることが、いわきの教育に必要だと思っている。
- ・先生のお話にも出てきたが、子どもたちはICTをどんどん使っており、社会の中でもデジタルの方向にどんどん動いている。PTAの保護者の中にもICTのスキルに長けている人や、実際に企業現場でICTを使って最先端のことを行っている方々がいると思う。その一方で子どもたちが先んじてICTを活用している場合もあり、逆に子どもたちのそのような経験や意見を「どこまで君たちはICTの活用ができるのか」と聞きながら授業を組み立てていく、そのような発想が必要だと思われる。そのような取り入れ方をしないと、先生主導で行ってうまく行かないのではないだろうか。
- ・そのような観点から、PTAや学校運営協議会等をうまく絡ませるなど、社会と連携した先進的なICT教育の取組みを行っている自治体を教えて頂けたら、我々も視察を通して勉強したり、検討できると思う。
- ・さらには先生同士での教材共有も大事な視点だと思っている。先生たちは非常に多忙な中で教員活動や教材研究を行っており、教材もいまだに紙で作って綴じている。ICTを活用できれば、先生同士での教材の共有や業務分担がしやすいと思われる。そのような形で先生方の多忙化の解消を図っているような実践事例があ

れば教えて頂きたい。

### 【豊福講師】

- ・PTA のスキルサポートや企業からの支援という話だが、まず学校側から「何をやりたいのか」というメッセージをはっきりと出す必要がある。学校には学校の世界、求めるものがあり、周囲は正直近寄りにくいと感じている。
- ・先生の中には、授業で「ICT は使えない、必要ない」と言っている方もいるが、学校の周りでは「ICT でやれることはあるんだけどな」と思っている人は多い。例えば、学校側から「社会とつながって〇〇のようなアクティビティをしたいと考えているが、何かサポートをお願いできないでしょうか」というつなぎを作ることは非常に重要と思う。
- ・私は東日本大震災の時に、大船渡第一中学校の校長先生から次のような相談を受けた。それは「これまでたくさんの物資・応援を頂いているが、今自分たちがどういう状況にあるのか、返答ができない。それをブログのような形でお返しができなかいか」というものだった。それに対し、私は「学校のホームページをしっかりと活かし、そこに子どもたちが記事を書いたり、先生たちが日々の様子をうまく載せるのがいいのではないか」と提案し、それが被災地域全体で広がった。やはり自分たちが何かしら社会にお返しをしたい、伝えたいという思いがあつて、行動につながっている。やはり学校側からそういうニーズを社会につなぐ必要はある。
- ・一方で、保護者の側に理解をして頂くことも重要であるため、世田谷区の実例をお話したい。2年前の12月に文科省から GIGA スクールの端末について「準備できた分から学校に入れなさい」とか「高学年から入れなさい」という指示が出ていたので、世田谷区は小6と中3に先行して端末を入れた。その際は学校の中に Wi-Fi が整備されていなかったことから、「まだ学校の中では使えないで、とりあえず家庭で使ってください」と言って渡すこととなった。しかし、そのまま家庭に渡したら大変なことになるという声もあり、保護者会等で説明するよう私が引っ張り出されたことがあった。実際何の説明も受けずに子どもが家に iPad を持って帰ってしまった事例が結構あり、保護者から大きなクレームが入った。都内のお子さんなので受験関連のクレームが多く、例えば「中学受験前の大切な時期に子どもが YouTube を見まくっているが、どうしてくれるんだ」など。
- ・ただ結果として良かったのは、学校側が「うちの学校ではこういう端末の使い方をしています」という話をしたり、教育長自らが「うちの区ではこういう使い方がいいと思っています」という広報をしっかりと行っていたこと。だから保護者の側も「なるほど、学校で iPad を使うのはこういうことなのか」と最後は納得して頂いた。
- ・先程講話の中でお見せしたが、児童・生徒がカードにいろいろなものを貼って作品を作り発表したりとか、作品をシェアしてコメントをもらったりとか、学校独特のやり方が必ずある。そういう取組みを保護者に見てもらい、「遊びではなく、しっかりと学びの中で使っているんだ」と分かって頂くことが重要。学校でなぜこのようなアプリを使っているんだろうということが分かれば、例えば外部としても、「私はデッサンの編集をしていて、関連するスキルも持っているから、これら学校のお役に立てるかも」と接点ができるわけである。そのようにすれば、地元にあるいろいろなリソースや知恵を学校に集めることは可能と思う。
- ・国内において、そのような取組みがうまく回っているケースは見られないことから、具体的な事例はお示しできない。ただし地域の協議会や学校の運営委員会だったり、教育委員会等がしっかりと音頭を取って、そういう「つなぐ」という部分を意識することがとても重要であり、一つ目の質問の回答とする。
- ・教員の教材共有のご質問についてだが、先生方に ICT の話をするのは非常に骨が折れる。いわゆる応募型で参加する外部の会議等で話をすると、喜んで頂けてい

るなど感じる。なぜならそれを聞きたい人間が集まるから。しかし、学校での研修、特に「絶対出なさい」的な研修で話をするのは、講師の側からするとかなり負担。実際に学校に講師として行った時に、一番前の席でふんぞり返って聞いている方がいて、「俺はお前の話に关心はない。俺の貴重な時間をこんなくだらない研修に使うなんて、お前は一体何様のつもりだ」という気持ちが如実に表れていて大変だった。

- ・当然のことながら、研修はニーズに合った形で組まれなくてはいけない。これまでの教員研修は、集合型でドンっと行う必要があり、しょうがない部分もあった。そこには先生方の多忙化という問題が背景としてある。
- ・研修のやり方は見直しをする時期に来ている。そのうえで、授業の研修や研究、教材作成など、どのようにして効率化できるのか。「データベースの活用」という策が一つとしてある。例えば Microsoft の「Teams」や、Google の「Classroom」という既存のツールを使って、そこに教材を載せることができるようにする。ただし場所を作っただけでは、経験則上言えるが、有機的には動かない。「データベースを作りました」や「教育センターに設置しました」というのは昔からたくさんあるが、先生たちはそういう所にデータベースを作ってもメリットはなく、使われたためしはない。
- ・そもそも授業研修や授業改善をしたいと思っている先生方は、そのような学校や教育委員会のリソースをそのまま使わず、「外」へ行ってしまう。これはかなり悩ましい問題。一つここで言っておきたいのは、全員に対してスキルトレーニングは確かに必要だが、最初から全員を相手にするのは結構大変だということ。学校を引っ張っていく人に絞って手厚くした方がいいのではないか。
- ・世田谷区の場合だと、区内に 90 を超える学校があつて、各校に「ICT インフルエンサー」と呼ばれる教員がいる。彼らは ICT の情報発信や普及啓発等を目的として先述の「Teams」や「Classroom」による仕掛けを作っている。さらには、「面白いことやりたいね。そこに予算つけるから寄っておいでよ」と自ら手を上げさせて、そこでコミュニティを作ったら、かなり注目された。「うちの学校でこういうことで困っているが、何か良い知恵がないでしょうか?」「お互いにどういうやり方でやってますか?」「うちで資料作ったけど、よかつたら使いませんか?」などのやりとりが始まり、変わってきた部分があった。
- ・つまりは、いわゆる情報の共有以上に「先生たちの動機付け」、つまりうまく機運を盛り上げてあげて、それを核としてうまく引っ張っていけるような土台を作つてあげること、それが GIGA の導入期には必要と考えている。

#### 【内田市長】

- ・どうもありがとうございます。大変参考になった。ぜひそういった先生一人ひとりの動機付けを促すようなことを考えていきたいと思う。
- ・冒頭にあったが、学校が「こういうことをやりたいんだ」と声を上げ、地域を引っ張ってくれるようなリソースや関連するスキルを持った方がいれば、「ぜひ」と手を挙げて頂けるような、お互い win-win の関係でやっていける環境づくりが必要だと話を聞いて感じた。
- ・それでは教育委員の皆様、せっかくの貴重な機会なので、ご質問、ご意見などあればお願ひしたい。それでは水野教育長お願ひします。

#### 【水野教育長】

- ・私は教員として現場を経験した教育長として、先生のお話を目からうろこが落ちる思いで聞いていた。日本の教育の良さとして「不易と流行」というのは大切だと思っていたが、今先生の話を聞いて、これまでの自分の考えは方向転換しないでいいかもと思っている所である。
- ・私は先生の話を聞くにあたり、先生の本をいくつか読ませて頂いた。約束事を大

人から子どもへ一方的に押し付けるのではなく、子どもたち自身が他の人間と話し合いながら身に付けるというのもとても大事なことであり、それが持続可能な学びにつながるものと考えている。

- ・「デジタルシティズンシップ教育」を参考にして、これからの中等教育に活かしていくたいと思っているが、その反面、2004年の長崎県佐世保市の中学校6年生女児の事件や、東京都町田市の事件などの事例があり、大人がインターネットによるトラブルから子どもを守つていかなくては、という考えがどうしてもある。
- ・この「デジタルシティズンシップ教育」を進めていくことは、今後の方向性としてとても重要だとは思うが、その学んでいく過程において、事件がこれから発生しないとは限らない。そこを大人がしっかりと見守りながらどのように教育を進めていくべきかが必要な視点ではないか。
- ・「デジタルシティズンシップ教育」は日本の現場において、どのような取組み状況であり、どの程度進められてきているのか。先端的な取組みを行っている学校や地域があれば、私も勉強していきたいと考えているため、ご紹介頂ければありがたい。

### 【豊福先生】

- ・確かに2004年の佐世保の事件は、学校への携帯電話の持ち込み規制につながっている。一方の町田市の事件はまだ詳細が判明していない。それは、教育委員会側から報告が上がってきていなかから。そのため、一方的な保護者・遺族側からの情報が週刊誌等々で賑わいを見せている状態にある。
- ・これは私が「逃げ」で言うのではないが、インターネットやチャットがそのような問題を引き起こしたのかと言えば、そうではない。元々背景にあった問題は、ネットやチャットを利用する前から存在していた。松山市の事件も、実際の事件が起きる前に成りすましがあったり、あるいは子どもたちが学校のネット環境を使ってやりとりしていた状況に対し、現場レベルで介入がうまくできなかったのではないかという批判があった。
- ・要するに問題の種は子どもたちのリアルの関係から発生したもの。ネットはそれを加速させる要因となっていた。だからと言って、ネットを封じてしまうことが、例えば学校の中でネットの環境を使えなくするというやり方が、本当に解決策になるかと言えば、絶対にそんなことはない。子どもたちは学校の端末が使えないとも、家庭の端末のLineで同じやりとりができる。果たしてネットを封じることが教育的配慮と言えるのだろうか。
- ・そこで私が今回お見せしたいビデオがある。これはネットのトラブルが身近な所で起きるという話だが、学校の中でどうやって解決するのという問い合わせになっている。ご覧頂きたい。(動画放映)
- ・まさに学校の中ではこの手の小競り合いやトラブルがたくさん起きている。その一方で、子どもたちがやりとりの中でうまく関係を修復することもできる。その過程を学級のレベルで繰り返し学んでいけば、「この場面では言葉を補わなくてはいけない」とか「外の人間に対してはしっかりと説明をしてあげなくてはならない」ということを徐々に覚えていく。
- ・結論としては、ネットに関わるということの「解像度」を上げて頂きたい。ネットを使ったからといって、いきなり凶悪でハイリスクな事件は起こらない。しかし小競り合ひはいっぱい起きている。我々は日々覚悟が必要。
- ・他の自治体の取組み状況については、私が一昨年「デジタルシティズンシップ教育」の本を出して1年が経ち、かなりいろいろな所で反響があった。全国の教育研究所の連合会で話をした際には、大分、宮崎、福井、山口など各都道府県の教育センターで話題にしてもらい、自治体レベルで取組みが進んだものと思っている。特に吹田市では今年度「デジタルシティズンシップ教育」の研究授業を1年間取組んでおり、シリーズで4回の授業がなされている。後半の授業を見せてても

らったが、子どもたちは1~2回目の授業内容をしつかり活かして発表をしていたので、とても定着している様子であり、ありがたく感じた。吹田市はおそらく今年度中に報告書を作ると思うので、それを見て様々な課題だとか授業の進め方などを参考にしてもらいたい。

- ・講演の頻度にしても、今回のような勉強会をいろいろな自治体で取り上げて頂いているので、かなり注目度は高くなっていると感じる。
- ・もう一つ重要な話としては、文科省は今のところ「情報モラル」という言い方をしており、基本的な方針として変えるつもりはなさそう。一方で文科省の諮問委員会に「GIGAスクールの展開にかかる協力者会議」というものがあり、その中で私は昨年8月に「デジタルシティズンシップ教育」について話をさせてもらった。その中で、東北大に堀田龍也先生というこの領域では著名な方がいらっしゃるが、堀田先生から、「デジタルシティズンシップ教育」の考え方は必要であり、取り組んでいくべきものとして賛同を頂いている。ご参考になれば幸いである。

#### 【内田市長】

- ・ありがとうございます。その他の委員の方はいかがでしょうか。それでは小峰委員お願いします。

#### 【小峰委員】

- ・私も5年前に教育の現場を離れ、現在は教育委員として活動している。先生から話がありましたように、私自身も書かないと覚えない時代の者なので、少しどキッとする場面が多かった。
- ・社会としてICT教育がこれから求められるというのは十分理解できたが、実際の問題として、やはり保護者として子どもの健康被害の心配や、「不登校で昼夜逆転してゲームばかりやっている」というような相談も寄せられており、ネット依存の心配もある。
- ・1回目の総合教育会議で内郷第一中学校での授業を見せてもらったが、先生の資料に記載されている「校内でのコミュニケーション」の部分が気になっている。先生たちがICTをどのように活用していくか、子どもたちが今の限られた関係から広げていけるのか。その具体的な方策として、いろいろなコミュニケーションを持つための技術を、先生方としても知りたいのではないかと思う。
- ・校内でのコミュニケーションを取る実例があれば、それを各学校で広げていくようになります。各学校の取組み状況が分かる資料はあるでしょうか。

#### 【豊福先生】

- ・こちらをご覧頂きたいが、資料の一番左側にあるのが「教材の提示や配布」、「授業の中継や配信」ということで、先生が一方的に送り付けるタイプのコミュニケーション。これは先生がコントロールしているので比較的簡単な部類に入る。
- ・しかし「共有・発表」の段階になると、先生が発問して子どもたちに応答させたり、先生が課題を添削して子どもたちに返すなどのやりとりが生じる。先生が情報の所有者であり、先生の側から種を出して、それにに対して子どもがコントロールを受けて答えるという関係なので、割と先生はやりやすいと思う。
- ・ここまででは基本的に今までの学級活動や授業の事例としてよく紹介されているものだが、問題はこちらの右側の図。右側はICTについて基本的に子どもたちの地頭が鍛えられていて、自立ができる状況になっているので、下手をすると子どもたちが「暴発」してしまう。
- ・つまり、子どもたちが先生の意図しないことをやりだすので、これで先生の側が慌てふためいて、「ちょっと待った」と穴塞ぎに走り出すので、イタチごっこが始まる。使えるはずだったものが使えなくなってしまうので、これは今喫緊の課題。
- ・生徒指導の先生などは、すぐに「これは示しがつかないから、絶対ルールを作っ

てびしっとやるべきだ」と対応しがちだが、それをしてしまうと後が続かない。この対応をどうすべきかが焦点となっている。

- ・「発表・プレゼンテーション」や「協働・チームワーク」、「学習成果の社会化」という部分についてだが、例えば、この「情報の収集・蓄積」の話であれば、このスライドを見てもらいたい。子どもが書いている画面を見ると、写真が張られているのが分かる。それは子どもが自分で撮った素材写真である。つまり子どもたちに「撮影をして」、「蓄積をして」ということを先生が指示して、子どもが自身の素材写真を持っているということになる。しっかりと素材が集積されて「まとめ」へつながっていることが分かる。そしてこれは1個だけの授業で終わらず、長めのスパンで考えられている。
- ・それから、このスライドでは子どもたちがブログの記事を書いている。子どもたちは、外部に情報を出すということはそれなりの配慮が必要であるということを、大人が言わなくてもある程度分かっているもの。それでも「一体どういうことが必要なのか」を一度問い合わせ、不安げに子どもが書いて持ってきたものを朱書き訂正してあげるのはとても大切である。
- ・こちらの「尾道のオススメスポット」は、尾道駅の裏手にある由緒ある小学校のホームページに載っており、子どもたちが広報委員として参加して、写真も撮っているし、外に文書を出す時にも絵を載せたりしているが、当然ほったらかしで子どもが勝手にやってる訳ではない。先生方が後ろで赤で訂正を入れて、しっかりと指導している。このようなことが学校の働きかけとしては重要。
- ・あともう一つ見てもらいたいのは、スウェーデン語で「ビブリス」と書かれており、図書館のこと。ストックホルムのど真ん中にあるこの小学校の図書館では、国語の授業において「創作の小説を書く」というカリキュラムがある。毎年子どもたちが参加し、制作に3か月程かかるが、筋書きを作る前に、主人公のキャラクターの設定をしたり、人間関係を作ったり、相当丁寧にやりこんでいる。出来上がった小説は30ページ～40ページの結構しっかりしたものとなり、これは紙で出版するのではなく、学校の図書館に納めるまでを行う。これがこの小学校固有のアクティビティ。ここはホームページは世界中から見られるので、スウェーデン語ではあるが、子どもたちが読み上げをしてくれる。このようなことを活動の一端として捉えていけばいいのかなと感じる。
- ・こういった取組みは割と世界では当たり前に行われているが、まだ日本国内ではこれと言ったという事例はほとんどない。そうは言いつつも、GIGAの環境も整った所で皆さん頑張っておやりになっている状況と思うので、そのようなことをこれからも紹介できればと思っている所である。

### 【内田市長】

- ・ありがとうございました。他の委員の方はいかがでしょうか。それでは宮澤委員お願いします。

### 【宮澤委員】

- ・私にはちょうど思春期にさしかかる子どもがいるが、まさに先生が資料でお使いになったアニメーションの内容を、普段からリアルに肌で感じている所である。
- ・「デジタルシティズンシップ教育」とはどういうものか、あれこれ想像をめぐらしていると、今までの情報モラル教育が、実は結構抑制的であったのではないかと感じた。例えば、車の運転で例えるならば、教習所でいろいろな危険性を教えてもらい、そして運転技術を学び、それから車の使用目的とか環境問題に配慮した車の選び方など色々考えて、さらに公道に出て運転して、その車を使って自分が旅行に行ったり、家族と一緒に楽しんだりなど、そのようなよりよい豊かな暮らしを育んでいくための教育システム、情報化社会のシステムなのかもしれないと思しながら聴いていた。

- ・質問ではなく、私の感想としてお話をします。自宅に今 iPad があり、子どもが調べ学習などで使用しているが、それがすごい状況になっている。実際昨日も社会科の資料を調べていたのだが、次から次へと興味が湧いてきて、子どもが「次はこれ、次はこれ」というように使っている。
- ・私たちの時代では分からぬ言葉が出ると紙の辞書を引いていたが、それと同じ様に、ページをめくるようにネットを使いこなしている。それから YouTube もよく見るし、ゲームもやる。一方で TV は全く見ない。本当にあの映像通りだった。
- ・私は子どもを生かすも殺すも、保護者の声かけひとつだと思っている。また実際問題として、各家庭の経済状況や意識レベルの差もすごく大きい。さらにリアルな話で言えば、学校格差というか、学校ごとの先生方の意識レベルも違うと思うし、色々と問題が浮き彫りになってきていると感じている。
- ・まずは先生が言った通り、全てにおいて保護者や子ども、教育者の意識が大事だと思う。成熟な情報社会を目指すために、実際自分の地域では、学校では問題は何なのだろうかと足元を確認するべき。問題は先生の言う通り、キーパーソンとなる方を一人、共有できる方を一人でも各学校に育てるべきという部分。「こういうデジタル社会がこれから来るんだよ」ということを周囲に知らせることが大事だと思い、感想として申しあげました。

### 【豊福先生】

- ・ありがとうございます。委員がおっしゃる通り、家庭の格差や学校の格差は実際ある。今回の GIGA スクールの展開にあたっては、学級間の格差がこれから必ずトラブルになる。例えば「隣のクラスが使っているのに、うちは使わせてくれない」など、そのような不満の声が子どもたちから必ずたくさん上がってくる。それに対し、先生が「いやいや私苦手だから」や「いやいや授業に必要ないから」という回答が、かなり鉄板の理由になってしまっている。
- ・そこで先程講話で申し上げた通り、「戦略」と「戦術」と「戦技」は各々意味が違う。先生方がよく言われる「ICT は不要」という主張は「戦技」にあたる。「社会で何が必要とされているか」、「子どもたちがこれから社会に出て行くうえで、何を考えなくてはならないか」をメッセージとして言い続けなくてはならない。
- ・また世田谷区の話をするが、12 月に iPad を家庭に配って大騒ぎになった際、教育長自らが口酸っぱくいろいろなメッセージを出したり、YouTube チャンネルで動画を作成したり、私たちも引っ張り出されて座談会をやったり、可愛らしいパンフレットを作成して教育委員会の名前で家庭に配布したりなど、そういう地道な取組みをしていた。
- ・これはムーブメントと言うか「こういう方向に進まないといけない」という社会的な認識を作ることなので、それを丁寧にやるべき。そうしないと、せっかく頑張ろうと思っている子どもたちや保護者の方、先生がいても、「いやいや、ICT なんていらないから」という圧力に全部つぶされてしまう。それはすごく勿体ないこと。今はそのような新しい働きかけだったり、チャレンジしようとしている人をうまく勇気づけるような取組みを同時に進めて頂けたらよい。

### 【内田市長】

- ・どうもありがとうございました。それでは根本委員お願ひ致します。

### 【根本委員】

- ・私はもう子育ては終わり、子どもたちが小学校・中学校の時には PTA 活動なども関わってきた。私はもう還暦も近く、「我慢してもやれ」という世代だったので、やっぱりそういう姿勢が大切だという風にずっと思ってきた。そのような中で、今回の先生の話を聞いて、ICT について「社会からそのような要請を受けているのだから教育も変わらなくてはならない」という視点が私にはなく、なるほどと

思はされた。

- ・また今日のお話を聞き、「開かれた学校」は ICT を通しても可能だということが分かった気がする。そのような理解でいいのかどうか、後でコメントを頂ければありがたい。
- ・それから私は、子どもはやはり皆いい所があつて、それぞれ違つている所があつて、得意な所もあれば不得意な所もあると思っている。だからどこかでスイッチを押してあげると、興味を持ったことをどんどんやり始める。やはり自発的に自分で気づいて、考えて行動することが大切だと思って接してきたつもりである。
- ・例えば先程の先生の話のなかで、子どもに「YouTube を普段たくさん見てるんだね。どういう分野を見ているのかまとめてみたら」と問いかける発想はなかった。やはりそのような視点というか、ポジティブに考えて子どもの可能性を引き出してあげるのが大切ということを学んだ。
- ・私が一番興味を持ったのは「モラルギャップ」の部分。つまり親と児童生徒のギャップについて、他の委員からも話があったが、その他にこのようなことをすれば、親御さんたちとの関係が良くなつたとか、あるいは親御さんたちへのモラル教育を行つた結果、このようないい影響があつたという事例があれば教えて頂きたい。

### 【豊福先生】

- ・たくさんの話題を頂いた。まず「書いて覚える」という話の所で言いたいことは、ICT が導入されたことで手段が選べるようになった。これは我々が当たり前にやつてきたことへの「解像度」、見え方がより精緻になったということを意味する。
- ・昔は手書きができないと表現ができなかつたし、相手にも伝えられなかつた。私たちが小学生の頃はワープロ等はなかつたので、それしかやり方がなかつた。今はいろいろなやり方がある。つまり、何が目標として叶えられていればいいのかを、少し引いて考えるという余裕ができたと思う。
- ・子どもたちは手書きが苦手だけど、表現したいという思いはある。まずは、「それを叶えることができるようになった」ということが言えると思う。
- ・次の「開かれた学校」の話については、1月中旬に西会津に行ってきました話をしたい。西会津は現在町を挙げて GIGA スクールの導入に注力している。また ICT を使って地元課題、地域課題を解決することに真面目に取組んでいる自治体もある。
- ・例えば地元の会津大学には「CODE FOR AIZU」という活躍中の団体があり、市民がオープンデータを使って、スマホやメールのサービスで社会解決するという取組みを行つてている。例えば、「ごみがどういう風に収集されているのか」という点に着目し、スケジュールをアプリで確認できるようにした。これにより、引っ越ししたばかりで右も左も分からぬといふ方でも、アプリを見れば全部分かるというサービスになっている。
- ・これは他市の事例だが、道路に穴が開いていた際に、誰かが市担当者に直接電話するのではなく、現状の写真を撮つてアプリに送付すれば、その写真がそのまま市担当者に送付され、「これから確認に行きます」という風になる。このような行政との連携が簡単にできるものを作つていているケースもある。
- ・これから ICT の動きとしては、学校や子どもたちがそのような課題を解決するために取り組んでいくということ。子どもたちが ICT を使って自分たちの手でアプリを作つたり、サービスそのものを作るという取組みと、子どもたちが自分たちの中でできるかもしれないという意欲が合わされば、大変面白いことになる。
- ・次に「得意・不得意」の話について。先ほど不登校の話もあったが、学校になぜ行けなくなるのかといえばいろいろな解釈がある。私は元々教育心理学の出身なので私見を申し上げると、ICT が直接的な原因となって学校に行けなくなることはない。原因はむしろ、元々子どもが自分で持つてゐる心理的な課題にある。例

えば家族との関係がうまく行かないとか、学校の先生と合わないとか、友達とトラブルになったなど。

- ・学校のカリキュラムがあまりにも厳しすぎて、不適応を起こしてしまうケースも多い。「手書きでがりがり書きなさい」というやり方だけを指導して、「それ以外のやり方は認めません」という教育をすれば、やはり不適応を起こす子どもは増えていく。しかし子どもとしては学びたい思いがある。しかし教室に行くことはできない。それではどうすればいいのだろうか。皆さんに考えてほしいのは、今代替手段は色々あるということ。
- ・新型コロナウイルスが流行する中で、保護者が子どもを登校させることについて不安となり、「リモートでやってください」と学校へ要請したが、学校側で「それはできません」と言って大騒ぎになった事例がある。それも考え方次第。
- ・何を叶えれば教育として条件が整ったことになるのか。まさに教育委員さんの皆さんでこのことをお考えになる時期が来ているのではないか。私から逆に質問で返してしまっているが、ぜひそういったことも検討して頂きたい。

#### 【内田市長】

- ・どうもありがとうございました。教育長宜しくお願いします。

#### 【水野教育長】

- ・先ほど先生からお話があった経済格差による問題について、本市でも GIGA スクールの導入の際に、低所得世帯の通信料の問題についてネットになっている。学校の教育活動にかかわる分野での使用と、家庭の一般的な使用とで区別できない部分があるが、家庭での通信料についてどのように解決を図ればよいか、お知恵を頂けたらありがたい。

#### 【豊福先生】

- ・新型コロナウイルス感染症対策で文科省からモバイル Wi-Fi を配られていると思う。私は、今年埼玉の鴻巣市と島根県の雲南市に GIGA のサポーターとして入っている。その自治体がどのように対応しているのかを具体的にお話したい。
- ・授業の中で使う際、先生が指示したときしか使わないというやり方をすると、経済的な格差のなかで GIGA の端末がセーフティネットになっているケースを救えなくなってしまう。利用時間を止めてしまうことになるため、発想としてはよろしくない。
- ・私は自治体に対し、「導入は社会福祉的なアクションの一環として行う様に」と申し上げた。どちらの市も結果としてそのような対応を取っている。鴻巣市の場合は、いわゆる就学援助の中に金額を盛り込むやり方をしている。
- ・社会福祉と申し上げたが、実は社会教育のセクション、つまり公民館や美術館、図書館などからも、子どもたちが GIGA 端末を使えるようにできないかっていう話があり、それをセットでやる形で考えられている。
- ・雲南市は、出雲から山奥に入った所にある山間地だが、市でケーブル TV を持つておらず、ケーブル TV のインターネットにアクセスする費用を就学支援に盛り込む形で解決している。つまり用途を限定して通信代のかかるかからないを判断したり、これは用途が違うから使っては駄目とすること自体、教育活動の学習経験にプラスには働かないという判断である。そこはぜひご検討頂きたい。

#### 【内田市長】

- ・今教育長がお話しした経済的な困窮者に対する支援は非常に重要な視点だと思っている。令和4年度の当初予算が大体固まりつつあり、詰めの段階にある。
- ・いわきの中でそのような実態があるのであれば、鴻巣市と雲南市の事例紹介があったが、具体的に人数や金額等分かれば、我々も積極的に対応していきたい。教

- 育委員会の方で課題と認識していれば、研究・検討をお願いしたい。  
・それでは最後に馬目委員、よろしくお願ひします。

【馬目委員】

- ・先生の講話はいわき市の教員にもぜひ聞かせてあげたい内容だった。私自身も非常に参考になった。「道具を使う、使いこなしてこそ道具」という先生の表現があったが、これは非常に重要なことで、そういう意識を生徒と教員が一体となって考えていくべきと思う。
- ・その中でやはり家庭での電子機器の使い方に関する評価の問題がある。家庭ではまだ全面的にそれを賛成して「さあさあやりなさい」という風にはなっていないと感じる。また PTA と教員との考え方の落差、これを何か解決方法があればお聞かせ願いたい。一朝一夕にはいかない問題だが、やはり家庭となるといろいろな問題が出てくる。その点をぜひお聞かせいただきたい。宜しくお願ひします。

【豊福先生】

- ・わたしは、学校とはいろいろな意味で、家庭での ICT の使い方も、使う意味も先導する立場と言うか、要するに保護者を感化していくという大きな役割を果たしうるという風に思っている。今まで紙や電話で行っていたことを全部デジタルに置き換えるということを学校が率先してやれば「あ、こんなもんか」というのが学校と保護者の共通認識になるということ。
- ・これは香港のインターナショナルスクールに行った時のスライドだが、子どもたちが放課後にごそごそとパソコンを引っ張りだして宿題をやるというので、見せてもらったもの。担任の先生からメールで宿題が出ていて、その中身としては、校内だけで公開されているブログについて「ブログを完成させて 6 人の友達に見てもらってください」というものだった。
- ・こういったことが普段から学校で行われるようになれば「なるほど、学校でデジタルでやり取りをするというのはこういうことなのか」と理解して頂けると思う。
- ・また世田谷の話に戻るが、今年の世田谷区の大ヒットは、欠席の連絡を「すぐ一発」というアプリできるようになったこと。これは多くの学校からすごく評価された。それまでは保護者が 8 時半までに学校に電話をして、教頭先生に「休みます」と伝えなくてはいけなかった。受け取る学校側も朝のドタバタの中ですごく大変なさなか、担任に伝達しなくてはいけなかった。それが、手元で「これこれこういう理由で休みます」ということを簡単に連絡できるようになった。
- ・また学校で健康観察を毎日つけていると思うが、アプリベースになったため「すごく手間が省けてよかった」と保護者にものすごく評価を受けている。
- ・子どもたちとのやりとりもそうだが、保護者の方にも利便性があるデジタルのツールはスマーズに普及、浸透していく。今はまだ学校がデジタルをしっかりと使えていないので、「うちは使わない」、「うちは金がないからできない」という方も多いが、もうこの時代の流れからは逃れることはできない。社会全体がそのように進んでいるのだから。「うちも考えるか」となってほしい。本当に考え直して頂きたいと思っている。

【内田市長】

- ・ありがとうございました。本当に先生にお伺いしたいことは多々ありますが、時間が来てしまったので、本当に貴重なお話を頂きありがとうございました。
- ・ぜひ、もし宜しければ、教育委員会で今後いろいろな課題や疑問が生じてくると思うが、今後とも豊福先生にご相談させて頂けるようなつながりを維持させて頂ければ嬉しく思う。
- ・そしてこのコロナ禍はひとつのチャンス。いわき市は、福島県全体もそうだが、これまでずっと震災復興、目の前のことに追われていた部分があり、ICT はこれ

からという所も多いと思うので、ぜひコロナ禍をチャンスと捉えて、教育に取り組んでいきたいと考えている。先生もお話しされたように、社会を子どもたちが生きていくツールとしてICTは必要不可欠であるし、逃げることはできないと思われる。

- ・これまで子どもをどうやって守っていくかということに比重を置きがちであったが、今後は積極的にICTを取り入れて、そして手書きだけではなく、いろんな表現手段としてICTのいい所も認めてあげて、市全体で盛り上げていくことが必要だと思っている。
- ・世田谷区のムーブメント、特にインフルエンサーという例があったが、一気に全部やろうとしても無理なので、そのような核になるような人間を中心に今後盛り上げたりなど、そのようなことも含め、他県他市の事例を参考にしながら、いわき市の中でも積極的に広げてまいりたい。

### 3 閉会

【署名】

水野 達雄

小山峯 美保子